

「世界の幸せは地域の幸せから」

宮城県仙台第二高等学校 2年

西野 麗華

「誰一人取り残さない」をモットーに世界をより良くするため国連総会で採決された持続可能な開発目標。通称 SDGs と呼ばれるこの目標は、ある調査によると日本の認知度はわずか 15%だ。この現実を知り、他人事ではないと感じた私は「自分にも何かできるのでは？」と思い、今年の夏から近所の子ども食堂でボランティアを始めた。

子ども食堂の活動は SDGs の中の貧困、健康と福祉、住み続けられるまちづくりなど数多くの項目に当てはまっている。では、どんな活動をしているのか。私の通う所では、子どもだけではなく、その保護者や地域に住むお年寄りなども対象としていて、地域の食卓として活動している。私の役割は子ども達の世話やマナーの指導のほか、バザー品の寄付やイベントの企画など多岐にわたる。一年間活動してきたことで見えてきた課題がある。それは、認知度の低さと需要の多さとのギャップである。日本の子どもの相対的貧困率が 7 人に 1 人で、私の周りでも個食や孤食に悩む同級生を数多く見てきた。しかし、こうした多くの人々がそもそも子ども食堂を知らなかったり、子ども食堂＝貧困という固定観念で利用しなかったりと、需要の多さに対し、認知度があまりにも低い。この状況を打破するために、ここでは新聞などのメディアを積極的に利用したり、区役所や大企業の方なども対象とした講習会を開いたりしている。その成果として今年度は参加者が約 2 倍に増え、より賑やかな食堂となっている。私自身は、友達や先生に活動を教えたり同級生を誘って実際にボランティアを体験してもらったりした。他にも国連や外務省に皆さんとお会いする機会をいただいた時にはこの活動を宣伝するほか海外での貧困の実態を教えていただき活動の参考としている。

こうした中、私自身に大きな心境の変化があった。それは高校で子ども食堂のボランティアについて話した時だ。友人は、私の話を聞いて、「そんなのあるんだ。知らなかった。何だか面倒なことをしているね。」と言ったのである。私はこの発言にとっても驚いた。小さい頃からニュースに関心を持っていた私としては、こうした状況を認知して実際に行動を起こすことは当たり前だと思っていたからである。困っている人を助ける活動を面倒だと言うだなんて、信じられなかった。他にも学力が高く、テストで良い点はとれても、社会の状況は分かっていない人は多い。調べたところ、ニュースや政治に関心がない日本人は外国と比べても多い。外国では宗教の影響もあって、日本よりも関心度やボランティアに対する意識が高いことが分かった。

現状に強い危機感を覚えたことで、私には大きな目標ができた。それは、テレビ局の報道部に入って、実際に取材をし、自ら伝えることで、より多くの若者やニュースに関心のない日本人に状況を知らせることだ。状況を変えることは、そんなに簡単ではなく、周囲の理解を得られないことも多い。しかし、状況を変えたいと思っている人が、強い信念をもって行動することが解決への一歩につながる。この強い信念をもった人を増やし、集まってアクションを起こすことで、大きな変革の波ができるのだ。そして、経験をふまえて、

将来的には国連で働いてより多くの人々の幸せに貢献したいと思っている。